



難民キャンプにて、農作業中に地雷で足を失った男性と話す鎌田實 JIM-NET 代表。農地には今も地雷が埋められ続けているが、「シリアに帰りたいですか？」という質問に男性は「もちろんだ」と答えた。

NEWS

傷ついた人が再び立ち上がり、歩く力を支える～シリア難民への義足キャンペーン開始します～

福田直美 (ヨルダン事務所長)P.1

2015 年度 (第 4 回) 通常総会報告・

NGO 非戦ネット立ち上げ報告 佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長)P.3

第 14 回 JIM-NET 会議報告 イラク小児白血病治療の現況と JIM-NET の今後の役割

井下 俊 (医師・JIM-NET 理事)P.4

2015 国連防災会議報告 小松真理子・

榎本彰子 (福島事業担当)P.6

鎌田代表のつぶやきP.8

「いのちの花」を描き続けるハウラさん、院内学級の先生イブラヒムさんが来日 ...P.8

傷ついた人が再び立ち上がり、歩く力を支える

～シリア難民への義足キャンペーン開始します～

福田直美 (JIM-NET ヨルダン事務所長)

※「義足をつけて学校にも行き始めたよ」

「モハンマド君 (8 歳) はとても活発で、兄弟の仲も良く、両親に愛されて育ちました。小学校に入学するのをとても楽しみにしていました。とても子どもらしく美しい毎日を送っていたのです。しかし彼は、シリア内戦で足を負傷し膝から下を切断せざるを得ませんでした」— ヨルダン人義肢装具士のドゥアさんが書いたシリア難民のモハンマド君の記録は、内戦が始まる以前のシリアで彼がどのように生活をしていたかという話から始まります。

モハンマド君はシリア国内で「たる爆弾」の被害に遭いました。「たる爆弾」は、円筒形の容器に金属片や火薬を詰めた爆弾で、



「これからサッカーで遊ぶんだ」

広い範囲に被害を及ぼし、無差別に多くの人が巻き込まれる危険な兵器で、シリア内戦で使われています。

義肢を作るためにやってきた時のモハンマド君の様子を、ドゥアさんはこう話します。「足を失ったことのショックが大きかったのね。『名前は何?』『どのようにして怪我をしたの?』— いろいろ聞いたけれども、彼は一言も話す事ができなかったの。私には、彼の足を元に戻すことはできない。いったい何ができるんだろう、って思ったわ」。しかし、ドゥアさんの指導で義足をつけ



て歩く練習をするうちに、徐々にモハンマド君に笑顔が増えてきました。数か月後には、3 年前に入学するはずだった小学校に行けるようになりました。今は義足を付けて走ることもできるようになり、友達と一緒に外で元気に遊ぶ毎日です。

一本の義足がモハンマド君に笑顔を取り戻させたように、私たちにもできることはあるはずです。JIM-NET では、内戦で手や足を失った難民に対し、義手や義足の支援を開始します。皆様のご支援をお待ちしております。

義足でカー杯に走ってみせるモハンマド君

シリア内戦で負傷した難民への 支援プロジェクト募金にご協力をお願いします！

郵便振込口座 00540-2-94945 日本イラク医療ネット (振込用紙に「難民支援 (ヨルダン)」とご記入ください)

★ JIM-NET 便りは今号から判型を A4 に拡大しました。



「たる爆弾」で負傷し歩行障害が残るリーマちゃんのリハビリを行う理学療法士

2011 年から始まったシリア内戦の影響で、400 万人以上の難民が国外に逃れて来ています。ヨルダンには、登録されているだけでも 60 万人強、実際には 150 万人のシリア難民が居住していると言われています。

中でも厳しい状況にあるのが、内戦に巻き込まれて空爆、銃撃、地雷などで負傷した人々です。脊髄損傷で下半身が麻痺し車いすで生活する人、手や足を切断したり運動機能障害がある人など、継続的な治療やリハビリテーションが必要な人も少なくありません。

また、障害者になった人々は、それまで自分で当たり前のようにできていた「歩く」「食べる」「学校に行く」「働く」という事が難しくなってしまうことで、生きていく自信を失ってしまいがちです。

シリアの紛争解決の兆しが見えず難民としての生活が長引く中、以前は自立し社会の一員として生きていた人たちが、母国の戦火を逃れ難民となったことで、支援に頼らざるを得ない状況に置かれています。難民の負傷者／障害者にとって、「これからどうなるんだろう」という将来への不安は特に高いと言えます。JIM-NET は、彼らが適切な治療やリハビリを受けられるための支援を行うとともに、負傷者、障害者が自信を持ってヨルダンにおけるシリア難民社会や将来のシリアの社会の一員として生きていく事ができるようになるための支援を模索していきます。

＊「車いすで外出できるようになったよ」

また、ザアタリ難民キャンプへの理学療法士のチーム派遣、在宅リハビリテーションの提供（アンマン市）、リハビリセンターにおける女性障害者に対するリハビリサービスの充実（イルビッド市）を通し、負傷者／障害者の症状の悪化を防ぎます。

アンマンに住むアフマド君（13 歳）は、銃撃による脊髄損傷で下半身が麻痺しています。理学療法士による在宅リハを受け続け、今では一人で車いすに乗って外出できるようにもなりました。理学療法士が行うのはリハビリの施術だけではなく、家で一人でできるトレーニング方法やベッドから車いすへ体を移乗する方法などの指導に力を入れています。

JIM-NET は、リハビリ従事者が適切かつ効果的なリハビリ提供や障害者の家族にも指導を行えるようになる事を目指し、理学療法士やソーシャルワーカー等に対し、能力向上のためのトレー

ニングも実施していきます。

＊負傷者の“希望”をつなぐために

また、重度の傷を負ったために高度な手術を繰り返し必要とする人も少なくありません。そういった人々にとっては、病院やその他の医療施設への移動もとても困難です。そのため JIM-NET は、車いす利用者や半身麻痺の人など一人では移動が困難な負傷者／障害者が、住居から病院、リハビリ施設に行くためのミニバンを走らせています。

このサービスがなかったらどうしていたかと利用者に聞いたところ、砲撃での負傷により下半身が麻痺し言語障害も残る男性は「リハビリに行く事もできず家に閉じこもっていただろう」と言いました。また、車いす利用者の別の男性は「タクシーを使うには金銭的負担が大きいので、病院に行く回数が減っていただろう」と言います。彼らの希望をつなぐために、ミニバンはこれからも毎日走ります。



病院に手術を受けに行く男性を運ぶミニバン。負傷者の希望をつないでいく

＊障害者が生きやすい社会へ

JIM-NET は、難民の負傷者／障害者を中心に、彼ら自身そして社会を元気にしていく活動を模索しています。例えば、障害者が集まって悩みを共有する場をつくったり、困難な事があればそれをどのように解決していく事ができるかを一緒に考えたりしていくことで、まずは彼らが自分たちの将来に対して前向きになることを目指します。

また、障害者を負った人々が以前と同じように社会の一員として生きていくことができるよう、社会を巻き込んだ環境づくりにも取り組んでいます。例えば、半身麻痺になり車いすで生活しているために学校に行けない子どもがいます。この子が学校に行けるようになるためには、学校の受け入れ環境を整え、先生や生徒たちに障害とどう向き合い対応するかを理解してもらう必要があるのです。

難民の負傷者／障害者は紛争の被害者であり、もっとも厳しい状況にありますが、決して「何もできないかわいそうな人」ではありません。JIM-NET はひとり一人の思いに寄り添いながら、彼らが自分たちで歩いていこうとする力を応援していきます。

※義足の値段：膝下の義足で約 7 万円（日本円換算・切断部位による）

★「子どもをまた抱き上げられるようになりたい」

バセムさん（35歳）は2012年、銃弾を受け負傷し、左脚を膝上から切断しました。負傷してすぐに病院に運ばれましたが、シリア国内の病院は、増え続ける負傷者に対して医師や医療品が全く足りていない状態が続いています。バセムさんの足の手術の際は、手術用の麻酔薬が病院になかったため、歯科用の麻酔が用いられたとのこと。バセムさんはその時の事を、「歯を食いしばったけれども、痛みの余りに気絶した」と振り返ります。

3度の手術を受けて義足を得ましたが、その義足が合わなかったため、バセムさんは何度も転びました。「人前で歩いては転ぶ、その自分の姿がとても悲しかった。だから外にも出にくくなった」ため、義足を付けなくなったそうです。

バセムさんはその後、以前とは違ったタイプの義足を得ました。「軽いとしても歩きやすい」と嬉しそうに歩くバセムさんは、「この義足で何が変わりますか？」という質問に対し、こう答えました。「僕には6歳、4歳、1歳半の子どもがいる。また子どもたちを抱き上げられるようになることが一番楽しみです。外も一緒に歩きたい」。

義足は、彼の日常の動作を可能にするだけでなく、日々の喜びを取り戻す手段にもなるのです。



義足をつけて歩行訓練を行うバセムさん。
義肢装具士が慎重に微調整を行う

★「普通」の状態に戻るように」

ザアタリ難民キャンプに住むイズディハールさん（31歳）は3人の子どものお母さんです。燃料気化爆弾という爆弾の被害に遭い、左腕を肘上から切断しました。その爆弾は、お腹の中にいた赤ちゃん、その時一緒にいた姪の命を奪っていきました。

「何が大変ですか？」と聞くと、「全てが普通、じゃないの」と答えたイズディハール

さんは、「義手ができて何が変わりますか？」という質問には、「まずは普通の状態、に見えるようになること。それから、家事も楽になると思うの」と答えました。

数週間後、新しく完成した義手を装着したイズディハールさんを訪問したところ、義手を器用に使ってじゃがいもの皮を剥く姿や、たらいに溜めた水で衣類を洗濯する姿を見せてくれました。「普通に見えるでしょ？」と言うイズディハールさんの嬉しそうな笑顔を見ると、「普通」の状態を奪ってしまう紛争の残酷さをあらためて感じざるを得ません。

イズディハールさんの腕を奪った爆弾は、一瞬で広範囲にわたり影響を及ぼすために国際的に使用の禁止が議論されている兵器の一つです。また、実際に使用禁止の国際条約がある地雷やクラスター爆弾も、シリアでは多く使用されています。JIM-NETは、そのような兵器が使われ一般市民の被害者がこれ以上増えることがないように、声を上げていきます。



片手で器用に掃除するイズディハールさん。

2015 年度（第4回）通常総会報告・NGO 非戦ネット立ち上げ報告

佐藤真紀（JIM-NET 事務局長）

6月19日、東京のカタログハウス本社ビルにて、第4回通常総会が開催されました。委任状を含め、14の団体、個人正会員の皆様の参加がありました。

2014年度は、ここ数年で、もっとも厳しい年になりました。6月に「イスラム国」がモスルを征圧し、大量の国内避難民が、アルビルにも流れ込みました。一方で、シリア国内でも、コバニなどで激しい戦いが繰り広げられ、避難してくる人が増えています。残念ながら、治安が良くなるだろうという予測は難しく、今後も、この地域での緊急救援活動を継続する必要は続きます。そこで定款に定められている、「イラクの人々への支援」を、「イラクおよび周辺国の人々への支援」に変更し、シリア人なども支援対象とすることが確認されました。

議案は全会一致で承認され、また、役員の改選も行われましたが、理事、幹事全員が再選されました。

※詳細は、同封しております年次報告書をご参照ください。

＊

今年は、戦後70周年を迎えます。しかし、政府は現在国会で、安保法制案を成立させようと審議しており、場合によっては、再び日本が戦争をする国になるかもしれません。武器輸出を可能にした日本は、戦争に頼った経済活動を活性化して行くでしょう。そうすると誰が戦争をやめようというのでしょうか？

JIM-NETがJVCとともに呼びかけているのが、NGO 非戦ネット

トです。実は、911のテロ後に、NGOも所属団体を超えて、戦争に反対し、武力行使によらない平和を目指し、声を上げようという運動が起きました。そのために立ち上がったのがNGO 非戦ネットでした。平和憲法と非戦の思想は日本が世界の平和に貢献する比類ない資源であり財産でありえたのです。

しかし、私たちはこの財産を活用して平和作りの実践を積み上げていくことを怠った結果が、イラクやシリアの混乱を生み出し、「イスラム国」に活動の場所を提供してしまいました。政府のみならず私たちNGOも市民の立場でもう一度非戦の理念にたった平和作りに取り組み、軍事化・暴力化する世界をねばりよく変えていく必要があります。そのために、私たちは、再びNGO 非戦ネットを立ち上げ、声を上げて安保法制に反対します。

是非、皆さんとともに、戦争しない社会作りを目指したく、今後も応援をお願いします。

< NGO 非戦ネット
立ち上げイベント >
元自衛官とNGOが考える安保法案（6月24日）。井筒高雄さん（元・陸上自衛官 レンジャー隊員 右）と佐藤真紀事務局長（左）。



イラク小児白血病治療の現況と JIM-NET の今後の役割

井下 俊（医師・JIM-NET 理事）

● 11 年間の JIM-NET 支援

イラク戦争から 12 年、イラクの小児がん医療を継続して専門的効率的に支援することを目指して、JIM-NET は 11 年間活動してきた。昨年度は、チョコ募金などの収入から約 4900 万円がイラクの小児がん病院やがん患者支援にあてられた。主には抗生物質や抗がん剤などの薬剤、医師や看護師の研修費、貧困患者の通院支援、放射線治療への補助費などである。活動当初からの金額を見積もとると総計 4 億 5000 万円程度になるであろう。

それほどのお金と 11 年という歳月を費やし、イラクの小児がん患者をめぐる治療環境は改善しているであろうか？なんら改善をもたらせずにいるのであれば、活動方法の変更や活動目標の再設定が必要になる。はたして今まで行った JIM-NET の活動は、治療成績と治療環境の改善に効果があったのだろうか？今年 2 月の JIM-NET 会議で発表されたデータをもとに考察する。

● イラクでの治療成績の推移

JIM-NET は毎年イラクの小児がん専門医たちとイラク国内で会議をもっている。イラク国内の各センターから、小児がんの中で最も多数を占める小児急性リンパ性白血病（ALL）の治療成績を発表してもらい、治療成績を上げるための方策について話し合っている。2006 年ごろから試験的に医学的データ集めを開始し、アルビルに事務所を構えた 2009 年からはクルド地区でのデータも加わり、イラク全体からデータが得られるようになった。しかし不正確な記録や種々の医学的定義のブレのために簡単には比較統合はできず、毎年徐々にデータの問題点を検討しながら補正を行い、やっと医学的に信用できるレベルに達した。

今年 2 月の会議では CWITH（バグダッド子供福祉教育病院）、BCSH（バスラ子供専門病院）、ナナカリ病院（アルビル）の 3 つのセンターから最新のデータが集まった。これら 3 つのセンターからは、2009 年から 2014 年までのデータを継続して得ている。

表：イラク国内 4 つのセンターでの ALL の治療成績

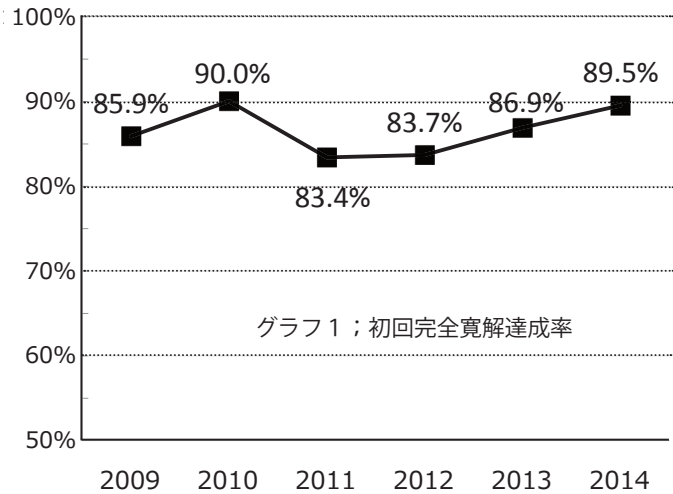
		2009	2010	2011	2012	2013	2014
診断症例数 (L3症例を除く)		216	214	221	228	200	196
治療前	治療放棄	13	1	9	13	6	5
	治療前死亡	4	6	4	3	4	3
	他施設へ紹介	3	3	4	1	9	5
治療開始症例数		196	204	204	211	181	183
初回治療後	治療放棄	0	2	1	2	2	3
	治療早期死亡	9	9	14	16	11	3
	不完全寛解	4	3	8	3	2	6
	完全寛解	183	190	181	190	166	171
完全寛解2年後	完全寛解維持	120	132	127	106	モスルのデータは省く	
	治療放棄	10	16	15	13		
	治療関連死	17	23	16	15		
	再発	36	19	23	30		

モスルのデータは省く

昨年まで継続して参加していたアル・アシル病院（モスル）の医師たちは安全面のため参加できず、モスルからは最新のデータは得られなかったのだが、昨年までのモスルのデータを加え統合するとイラク全土の症例数の 5 ～ 6 割をカバーできる（表）。そのデータを素に初回治療終了時と診断後 2 年時での治療結果を解析し、2009 年からの治療成績の推移を示す。

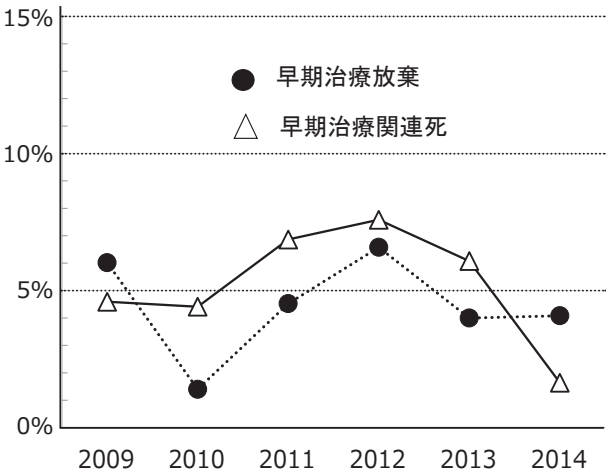
1) 初回治療の転帰

ALL において初回治療は重要である。初回治療に成功し患者体内に白血病細胞が認められない状態（完全寛解）になれば完治する可能性が高い。イラクで診断を受けた患者の初回完全寛解達成率（グラフ 1）は 83% から 90% の間で推移している。医療先進国では 98% 以上であり、イラクの結果は満足できるものではない。

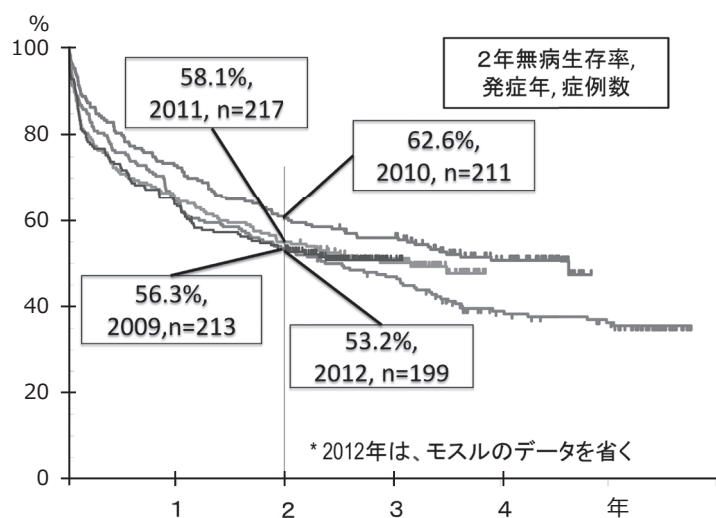


この低い完全寛解率の原因は治療放棄と早期治療関連死である（グラフ 2）。初回治療を受けずに、あるいは治療を行ったもののその結果が出ないうちに治療放棄をしてしまう患者が 5% 程度いる。また、初回治療による合併症を乗り越えられずに亡くなってしまいう早期治療関連死は 2014 年を除いて 5% 程度で推移しており、完全寛解達成の障害となっている。

グラフ 2：治療早期での治療放棄と治療関連死



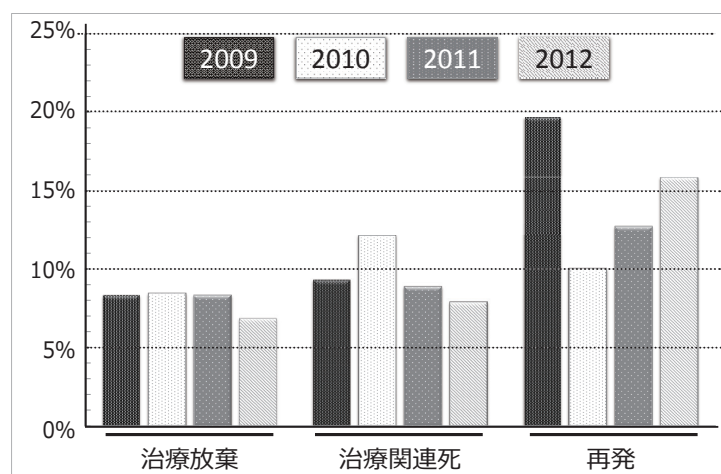
グラフ 3；全症例の診断からの 2 年無病生存率



2) 診断 2 年後の転帰

全症例の診断からの 2 年無病生存率をグラフ 3 に示した。初回完全寛解を 2 年間保ち、完全治癒の期待がさらに高まる症例である。医療先進国では 90% 前後であるが、イラクでは一番良好な年でも 60% を超える程度であり、2010 年以降成績は低下している。

グラフ 4；完全寛解達成 2 年後の寛解維持失敗



初回完全寛解を達成した症例のうち、2 年間の寛解維持に失敗した原因をグラフ 4 に示した。ここでも初回治療時と同様に治療放棄と治療関連死が寛解維持失敗の主な原因であることがわかる。それに加えて再発症例が 10% 以上あり寛解維持が途絶えている。因みに医療先進国では治療放棄は 0%・治療関連死 2-3%・再発 5% 前後である。

●治療レベルの進歩とイラクの現状

ALL の高い完全治癒率を得るためには、初回完全寛解率を高くしそれを維持することにかかっている。つまり 1) 治療放棄をなくし、2) 治療に関連した合併症での死亡を防ぎ、3) 再発を少なくすることである。しかし、開発途上国では種々の原因によりそれを達成することが困難である。

患者家族は貧困や治安の問題で治療継続が困難で、完全治癒の可能性のある状態でも治療放棄せざるを得ない。感染予防策の不徹底、あるいは医療従事者の知識不足や不適切な医療設備により治療による合併症を克服することができず、治療関連死が生じる。

また ALL は一様な疾患ではなく、治療に反応良好で再発の少ないものから治療に抵抗しすぐに再発するものがある。医療先進国では診断時にそれを確認し、症例ごとに適した治療の選択を行っている。しかし発展途上国ではそれができず、予後良好な症例に過剰な治療を行い不要な治療関連死を生じさせたり、予後不良例に必要な治療を行わずに再発率が高まったりする。治療レベルを進歩させるためには、これらを克服せねばならない。治療放棄率が 0% になり、治療関連死と再発がわずかな難治症例のみに限ようになったとき、治療レベルが満足するレベルに達したといえる。

今回の解析で、イラクの医療レベルはいまだ発展途上であり、2009 年以降改善がみられていないことが明らかになった。イラク戦争が終わって 12 年経過したが依然として途上のままである原因は何であろうか？ JIM-NET の力不足を否定はしないが、それよりもいかにともしがたい外的要因の影響が大きい。

日々報道されているようにイラクは政治的混乱が続いている。イラク政府は市民に安全を提供できていない。貧困対策に予算を費やす余裕はなく、計画だった病院の整備や小児がん治療専門家の育成はできていない。厳しい予想だが、今後数年のうちにそれらが改善される可能性は極めて低いと言わざるを得ない。

●今後の JIM-NET の役割

小児がん医療の進歩には計画的な国家的取り組みが必須である。しかしがん治療は費用対効果が悪く、発展途上国では周産期医療など他の医療政策よりも優先度は低くなる。国が成熟し余裕をもったのちに初めて進歩がもたらされる分野である。

残念ながら今のイラク政府にその余裕はない。政治状況をみると、今後数年のうちに政治的安定を果たし飛躍的に小児がん医療に進歩がもたらされることは望み薄だ。そんな中 JIM-NET が果たすべき役割は何であろうか？

今年の JIM-NET 会議は、ISIL が後藤健二さんらを殺害した直後で NGO 関係者らのイラクへの渡航の是非が問われる中で会議であった。今後も継続して支援を行う JIM-NET の意志は表明できたであろう。しかし、イラクの小児がん医療に進歩をもたらすことはできていない。今後も同じ支援を継続するのみでは、イラクの小児がん患者を救えない。少しでも多くのイラクの小児がん患者を救う術は何であろうか？それを考えだし積極的に行動する必要がある。



JIM-NET 会議に参加した医師ほか各関係者
(2015 年 2 月 27 日・アルビルにて)

2015 国連防災世界会議

～福島原発事故の体験と教訓を、市民の立場から訴える～

2015 防災世界会議日本 CSO ネットワークの取り組み

小松真理子（JIM-NET 福島事業担当）

防災世界会議って、その名の通り、これからの防災戦略について、世界の国々が集まって話し合う会議です。英語では、World Conference for Disaster Risk Reduction といい、災害による被害を低減させるための会議、といえより正確でしょうか。

この「減災」という言葉は、災害の発生に備えて被害をできるだけ少なくするための取り組み、という意味ですが、最近日本語でも「防災」と共によく聞かれるようになりました。世界各国で起こった様々な災害について、またそこで行われている防災・減災の取り組みについて情報交換をし、防災を世界的に進めていくための指針を打ち出す貴重な機会が、この防災世界会議です。

第3回防災世界会議は2015年3月14日から18日まで、国連の主催により仙台市で開催されました。過去にも2回開かれているのですが、そのすべてが日本（1994年横浜、2004年神戸）で行われているってご存知でしたか？ 前回の兵庫会議では兵庫行動枠組み（HFA）が打ち出され、主に防災・減災の行動についての指針が国際的にはじめて共有されました。HFAに基づいて、国内の防災方略を整備してきた国も多くあります。

そこから10年。世界規模でより頻繁・甚大になった印象をうける各種災害、そして日本はとくに東日本大震災を経験して、復興の道半ばの東北・仙台で、第3回目の会議が開かれたのです。

しかし、この防災世界会議の取り組みには、大きな課題がありました。それは、前回2回において市民社会の参加への言及がなかったこと（被災するのも、支援活動するのもその大半が一般市民なのに！）、そして、東電福島第一原発の事故が引き起こしたような原子力災害を、防災世界会議が議題にしないという前提があったのです。今後15年間の防災指針となる「ポスト2015 防災枠組み」を作成する機会であるのに、扱う災害は自然災害のみ、営利目的が行き着いた先の人為災害は扱わないという姿勢だったのです。

原発事故によって、これほど多くの人々の日々の生活が変わってしまいました。被害の規模を知れば知るほど、その事実や対処法（そしてその功罪）を、まさに被災地で開かれる世界防災会議が扱わなくていいのか？ 放射能の見えなさに甘んじて、世界各国から集う人々に原子力災害のなんたるかを伝えないまま復興を謳い、今後の危機に備えなくていいのか？ という声が上がってきたのは当然のことです。

かくして2014年1月、違和感をもった団体が集まって、2015 防災世界会議日本 CSO ネットワーク（通称：JCC2015）を結成しました。おりしも JCC2015 立ち上げ時はシリア難民が急激に増加していた時期に重なっていましたが、JIM-NET も104の参加団体の1つとして名を連ねています。

JCC2015 は、世界的な防災にかかわる市民社会団体のネット



ワーク・地球市民社会のための防災ネットワーク（GNDR: Global Network of Civil Society Organisations for Disaster Reduction, 2007年創設）とも連携し、仙台会議に先駆けて行われたバンコクでの政府間準備会合への参加などを通じて、多数の提言や声明を発表してきました。また、「福島10の教訓ブックレット」を作成し、福島第一原発事故で得られた経験を分かりやすいパンフレットにして多国語で出版しました。

そして、日本政府への再度の働きかけにより、ようやく防災世界会議でも「Technological Disaster テクノロジーによる災害」が議題として扱われることになったのです。会議本番の分科会では、原発事故被害のことや、化学工場の爆発事故といった産業災害被害などが発表され、また日本政府代表からも「安全神話に決別し、事故を想定した対策を進めることが重要」という発言がありました。これは、とても大きな市民社会参画の成果といえるでしょう。

市民社会の取り組みは、もちろん会議当日にも満開！でした。最終的には世界から187の国々が本体会議に参加し、全体では国内外から延べ15万人が参加するという、非常に大規模な国際会議でした。参加者のさまざまな興味関心に応え、またできるだけ多く一般市民の発言の機会を設けようと奮闘したのがJCC2015です。

主には各国の政府関係者しか参加できない本体会議に加え、福島でのシンポジウムとツアー開催、ピープルズパビリオン（交流テント）、エキシビジョン・ブース（展示発表）、フィールド・エクステンジ（被災地バスツアー）、そして市民防災世界会議（最終日まとめ）といった多彩な機会を提供しました。

JIM-NET も、後述のワークショップを他2団体と合同開催しました。とても忙しい1週間でしたが、多くの人々が学び交流をし、防災・減災につながるよりレジリエント（強靱）なネットワークを築けた機会となりました。本体会議では無事、「仙台防災枠組」に合意がされ、災害による被害の低減に加え、新たに4つの優先行動（災害リスクの理解、災害リスク管理のための災害リスクガバナンス、強靱化に向けた防災への投資、効果的な応急対応に向けた準備の強化と「よりよい復興（Build Back Better）」）が加えられたことは、到達指標が打ち出せなかったことを補うポイントといえるでしょう。

ヨルダン NGO 代表・アイユーブさん来日記

榎本彰子（JIM-NET 福島事業・海外事業担当）

JIM-NET 福島事業では国連防災世界会議の期間に合わせて、ヨルダン NGO「エネルギー節約と持続可能な環境社会」代表のアイユーブ・アブダイエーさん（写真）を招聘しました。

防災会議開始3日前の3月11日、アイユーブさん来日。3月にもかかわらず、事前イベントが開催される福島は雪が降る寒さ。「ヨルダンから来日されて、さぞ寒いでしょう」と声をかけると、「前にモスクワに行ったことがあるから、それに比べればここは寒くないよ」と、疲れも見せずに笑顔でした。

翌12日は福島フィールドツアーに参加。まず原発・放射能の農業への影響について飯館ファームの伊藤さんから説明。それから飯館村・南相馬市を通り、浪江町役場で現状の説明を受けました。途中、町内をバスの中から視察し、住む人もなく4年前のままの建物、放射性物質の除染作業による除去土壌仮置場を目の当たりにしました。その後、桑折町にある浪江町からの避難者の避難所を訪問し、震災時の紙芝居と映像を見させていただきました。

13日は「市民が伝える福島 世界会議」開催。福島原発災害と闘う市民の取り組みを振り返り、その教訓を世界に伝え同様の被害を未然に防ぐための具体的行動を導き出す会議です。福島の人々の現状を伝え、海外ゲストと討論が行われました。イベントが終了したのは夜の9時で、その日のうちに仙台への移動。

14日、いよいよ国連防災会議の本体会議とパブリックフォーラム（PF）開幕。この日はJIM-NET・ピースボート・シャロームが共催で「市民参加による原子力災害の予防と対応」についてイベントを開催しました。これまでもJIM-NETと協力してきた福島での活動や、3aの野口さんが放射能測定や食品測定に関して、現地での活動を報告。シャロームの吉野さんが放射能測定について報告し、海外のゲストから、海外での原子力災害に向けた防災の取り組みを紹介。アイユーブさんからは、ヨルダンの原発計画について報告をいただきました。イベント後は、国連防災会議本体会議に参加するためのパスを作成し、本体会議場に入りました。会場では同時に複数の会議が行われており、「Mobilizing Women's Leadership in Disaster Risk Reduction」についての会議を傍聴。奥山仙台市長は、東日本大震災での災害・避難の際の女性の状況を説明。「女性ももっと防災の意思決定に関わり、リーダーシップをとるべき。災害マネジメントの枠組みにジェンダー平等の観点をさらに取り入れていくべき」など話されていました。

そのあとPFの「首長会議」に参加。浪江町長、南相馬市長、前東海村長、前フランス・ビドン町長らが発表されました。各首長の話は、「原発事故直後国や東電からの状況説明・避難連絡がなく、独自で判断して動くしかなかった」「事故の検証が行われていない」「原発事故が憲法の生きる・幸福・財産等の権利を侵害している」など。感銘を受けたアイユーブさんは、前東海村長の村上さんにヨルダンから持参した記念盾を贈呈しました。

15日はスタディツアーで宮城県女川を訪れ、女川社協で実際に津波の被害にあった社協のスタッフから津波被害の状況につい

て話を聞きました。その後、女川原発PRセンターを訪問し、センターのスタッフから女川原発についてと福島大学の後藤先生から日本の原発に関する教育とPRについてのプレゼンを受けました。最後には、PRセンター前で、参加者が各々の原発に対するメッセージを掲げて記念撮影しました。

16日は、本体会議やPFのイベントに参加しました。特に、中東地域の都市計画と防災対策に関するPFに参加し、安全なまちづくり、防災対策（特にhousing）、モロッコ・アガディールの事例が紹介され自然災害（洪水・干ばつ・地震）に対する都市計画の説明を聞きました。質疑応答では、アイユーブさんが中東での災害には原発災害リスクもあり、自然災害とも関連性が高いことをコメント。発表者の1人は世界銀行の中東地域における防災対策担当で、アイユーブさんも「ネットワークが広がってよかった」とのことでした。

17日は会議参加の最終日となり、本体会議を傍聴しました。イグナイトステージで、福島県大熊町出身の福島大学生が発表していました。ここで何と、大ハプニング！各国代表が登壇する「Official statement」でアイユーブさんが登壇することになり、福島のことや、原発災害についてアピールしました。実は、今回の防災会議で決定される行動枠組みの中に、原発災害・産業災害がtechnical hazardとして入っているものの、本体会議では福島のことばかり話して合いませんでした。登壇後しばらくは、2人とも興奮が冷めませんでした（下記写真）。

18日は、福島ツアーに参加に参加し、桜井南相馬市長からお話を聞きました。「地震・津波・原発災害と3つの災害が重なった上に、避難指示



が政府からなく、独自に判断せざるを得なかった」など、当時の状況を説明。現在の問題は、放射能・将来の不安、賠償金の格差による摩擦、地域や家庭内での考え方の違いによる摩擦、など。特に心の問題が一番大きい。世代により考え方が違い、若者はなんとか頑張っていこうとし、高齢者はあきらめ（現状受け入れ）が感じられる。今後も人々に希望をもって、前向きになってもらえるよう市長として精一杯やっていくとおっしゃいました。続いて、南相馬市小高区を訪問し、小高出身で自身も被災した実業家の和田さんから地元での起業を支援する取り組みの説明を受けました。そして、浪江町、双葉町付近をバスで視察。その後、いわきのNPO たらちね、NPO ザ・ピープルを訪問、コットンプロジェクトや自然エネルギーカーを見学しました。

19日、東京を訪れたアイユーブさんは、議員会館で財務省、経済産業省関係者との会合と記者会見を行い、帰国の途につかれました。

今回アイユーブさんを招聘し、ヨルダンをはじめとした中東地域への日本・福島の実験を伝えることの重要性を感じました。JIM-NETは、今後も福島支援を継続し、また福島での教訓を世界に伝えていく活動を行っていきます。

鎌田代表のつぶやき～イラク難民キャンプで大笑いの健康づくりが始まった

難民キャンプでは絶望がのさばっている。テントの中でみんなゴロゴロしている。1月・4月・6月と難民キャンプで巡回診療しながら感じたのは、この人たちに生きがいや目標や絆を持ってもらうことが大切なのではないか、ということだった。東北の被災地に行くときも、常に健康の話をしながら、生きがいや絆の話も必ずしてきた。

ISの迫害に遭って、アルビルには4万人を超える避難民が押し寄せてきている。この国内避難民の人たちのキャンプにある三つの診療所に、JCF（日本チェルノブイリ連帯基金）は薬の供給をしている。JIM-NETはJCFをサポートしながら、さらにドホークやダラシャ克蘭のキャンプに精力的に給水車を回したり、炊き出しをしたり、薬を配ったり、冷房機械を置いたり、妊産婦支援をしたりしている。

イスラム国に捕まり無理矢理結婚させられた女性たちが脱出してきたときも、診察をしたり病院へ連れて行き、婦人科の検診を受けさせたりしている。10年間活動してきたことで、地域の人たちがJIM-NETの活動を評価し、見えないところで守ってくれているように思える。

今回この難民キャンプで健康づくり運動を始めた。JIM-NETが長く関わっているダラシャ克蘭キャンプでは50人ほどが集まり、聞いてくれた。巡回診療をすると、高血圧や脳卒中、心臓病、糖尿病が多いことがわかった、そこで僕は5つの目標を出した。

1、減塩 2、野菜をたくさん食べること。野菜をたくさん食べようと話すと、難民の人たちが笑い出した。「俺たちは肉が好きだ。UNHCRにもっと肉を出せと文句を言ってきた。そうか、野菜が大事なんだな」と、ひげの親父が言い出した。

「歩け歩け運動が大事。毎日最低15分散歩しよう」。3番目の目標を言ったら、みんな腹を抱えて笑いこぼれた。爺さんが言った。「俺たちISに追われて2週間も歩き続けてきて、やっとこのキャンプにたどり着いたんだ。もう歩きたくない」。私もムダに

歩きたくない、と、お腹の大きいおばさんが言った。

ここで僕は負けなかった。「みんなふるさとに元気で帰りたいだろう。脳卒中になってから、ふるさとに帰るんじゃ寂しいぞ。まず健康が大事だ。テントの中でゴロゴロしてちゃダメだ」と話した。ここへきてみんながぐっと本気になりだした。やっぱりみんな、ふるさとに元気に、早く帰りたいのだ。自分の健康や命の大切さを考えながら歩いてほしい、と付け加えた。「そして、自分の命や健康だけではなく、人の命も大事だと広げてみようよ。そうすれば、アラブ人とクルド人の対立やシーア派とスンニ派の対決なんか、昔のように消すことができるよ」。

4番目は生きがいを持つこと。必ず元気でふるさとに帰ると目標を持とう。5番目は絆。隣近所と声を掛け合い支えあおう。自分より困っている人がいたら、自分もつらくても人に手を貸してあげよう。そうすると不思議な生きる力がわいてくる。

この5つで、元気でふるさとに帰ることができる。みんなに目標の5つを最後に聞いてみた。全員が合唱するように『減塩・野菜・散歩・生きがい・絆』と歌のように大合唱になった。

今世界中で5千万人の難民がいるといわれている。散歩を出した難民キャンプなんてないだろうな。ここから始まるのだ。まず健康。そして命の大切さ。そしてその次は必ず、人間と人間の関係がスムーズになっていき、平和がやってくる。

これがブームになって、世界中にある難民キャンプで健康づくり運動が行われるようになったら面白いな、と思っている。



難民の皆さんに「5つの目標」を説く鎌田代表。(2015.6.4 撮影:田山達之)

「いのちの花」を描き続けるハウラさん、院内学級の先生・イブラヒムさん & 娘さんが来日！

イラク・サマワ出身のハウラ・ジャマルさん（19歳）は、9歳の時に白血病を発症し、治療中にJIM-NETの院内学級で絵を描きはじめました。ハウラさんの絵は絵本『ハウラの赤い花』をはじめ、ポストカードやチョコ募金の缶にも使われています。

今年7月31日から8月12日まで、白血病を克服したハウラさん（写真右）を招聘し、日本の「花」の絵を日本の子どもたちと一緒に描き、交流の中でイラクの現実を伝えるイベントを開催します。院内学級の先生であるイブラヒム・ムハンマドさん（写真左）と娘のファートマさん（14歳）も共に来日します。参加ご希望の方は、お問い合わせ専用電話（080-4837-4015）へご連絡を！

【イベントプログラム】※詳細調整中 最新情報はホームページに掲載します。

8月1日（土）東京 14:00 絵本「ハウラの赤い花」朗読会（俳優座劇場）

2日（日）札幌 18:30 イブラヒムさん報告会 & 交流会（札幌エルプラザ）

◆8月1日（土）～8月3日（月） 同会場にて開催「ハウラとイラクの子どもたち絵画展」

4日（火）～5日（水）帯広 ハウラと一緒に花の絵を描こう（六花の森）

9日（日）東京 14:00～16:00 トークと交流会（パルシステム生活協同組合東新宿本部 2F）

11日（火）東京 9:30～新宿クリエイターズフェスタ 2015（全労済ホール）



【編集後記】戦後70年の夏一国会では安保関連法案をめぐり、会期が大幅に延長されました。日本の軍国化は、決して容認できるものではありません。JIM-NETをはじめNGOが手を結び、「非戦NGOネット」が立ちあがりました。3ページの報告を、ぜひお読みください。（あ）

JIM-NET 便り 2015年7月号 発行日：2015年7月13日
発行：特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク
〒171-0033 東京都豊島区高田 3-10-24 第二大島ビル 303
Eメール info-jim@jim-net.net TEL/FAX 03-6228-0746